

第57回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術(2017)
日本館キュレーター指名コンペティション講評

国際展事業委員会

水沢 勉(神奈川県立近代美術館 館長)

柏木 博(武蔵野美術大学 教授)

島 敦彦(愛知県美術館 館長)

長谷川祐子(東京都現代美術館 チーフキュレーター)

港 千尋(多摩美術大学 教授)

※講評中の敬称は省略させていただきました。

水沢 勉(神奈川県立近代美術館 館長)

今回の4名の候補者から提案された展示アイデアは、アーティストとキュレーターの個性を前面に押し出し、それをことさらに主張するスペクタクル性を、強調したものではなく、むしろ、それとは一線を画し、「弱さ」の「強さ」といったらよいのであろうか、力みすぎるとかえって見えなくなってしまうような、世界への気づきをきっかけに、しなやかで、ささやかであればこそ、正面から否定することが逆に困難な世界の反転を注意深く仕掛ける点に共通性が認められた。もちろん強弱の差はあるが、重く過剰なまでの精神性を充填した前回の塩田千春(キュレーション: 中野仁詞)の圧倒的な物量の展示とは好対照であった。

杉戸洋の絵画と最新の素粒子理論の成果の組み合わせ(保坂健二郎案)。原発事故によってひとばかりでなく物も退去を余儀なくされた空間を生活資料によって再構成する藤井光作品(チェ・キョンファ案)。オブジェを展示するのではなく、大理石の粉末を塗布した壁そのものをその崩壊も含めて鑑賞する空間構成による篠田太郎のインスタレーション(片岡真実案)。いずれも洗練されたものであり、日本館の空間を消去するのではなく、それをいったんしなやかに受容したうえで、それに寄り添うかたちの展示空間の提案であったと思う。

わたしは個人的には、片岡案の篠田太郎の作品に深くこころ惹かれたが、最終の議論によって委員のあいだで、意見の一致をみ、鷺田めるろ案の岩崎貴宏の展示が第一席に決定した。

鷺田案もまた既存の空間をうまく生かし、しかも、中央の開口部にも工夫が凝らされていた。最小限の介入でありながら、しかし、それだからこそ、そのテーマの重さが逆説的に鮮明に浮かびあがる「気づき」をそれはわたしたちに促すはずである。一見、日本的な見立てや、木という素材や、巖島神社といったモチーフが使用されていて一見浅薄な「異国趣味」という誤解を誘導しかないのだが、それも観客の注意力が細心精緻な展示によって精密に喚起されることによって、普遍的な現代の問題であることがおのずと意識されるように仕組まれている。

作品そのものが脆弱できわどく、またコンセプトもある意味で意図的に微弱の、いうならば「音圧」に設定されているのだ。だからこそ強く喚起されるはずの危機性を、水没の危険と背中合わせの「死の町」ヴェネツィアでどれほどの尖鋭化できるのかという期待と不安を抱きながら、わたしもまた最終的に鷺田めるろによる岩崎貴宏の展示に賛同を表明した。

柏木 博(武蔵野美術大学 教授)

4名の候補者からの提案書を拝読するとともに、プレゼンテーションをしていただきました。素粒子物理学(サイエンス)を参照した「弱さ」をテーマとした提案、イタリアを代表する素材大理石の粉を粘土にして空間を埋め尽くすという提案、3・11で被害にあった民俗資料館の「記憶」をテーマとした提案、どれもがとてもこんにちの問題を示して興味深いものでした。

そうしたなかで、鷺田めるろ氏の提案は、東京などの都市ではなく、地方において、せりあがってきている現象を示すことをコンセプトにしていました。その現象は、日本にとどまらず世界中で出現してくるであろうという予見をふくんでいます。その現象とは、高齢化と人口減少、農業や漁業など第一次産業の収縮と減少、その結果、発電所やコンビナートの立地を受け入れざるをえない状況、さらに、巨大ショッピングモールなどの施設による、画一化、地域商店街の疲弊(いわゆるシャッター街化)などです。

そうした現象が引き起こした「風景」を、岩崎貴宏の立体作品で構成するという提案です。その作品は、思わぬような日用品によって、「コンビナート」「海洋開発施設」「Tectonic Model」(巨大クレーン)「Reflection Model」(水面に反射するモデル、ベネチアの水を意識している)などで、表現するというものです。マクロな現実の現象をいわばマイクロなもので表現する。それは日本的な「見立て」のようなまなざしを意図してもいます。マイクロなものによって大きなものを示唆することでは、いわゆる歴史におけるマイクロヒストリーの考え方を想起させます。また「見立ては」、シュルレアリスムにおける「発見されたオブジェ」を思わせます。

その繊細な表現によって現代の大きな問題を表現するコンセプト、さらには、表現の美しさは、人々を魅了し、また十分な説得力を持つものと思われました。

島 敦彦(愛知県美術館 館長)

四名のキュレーター候補者によるプレゼンテーションは、それぞれ分野も手法も考え方も対照的で興味深いものであった。いずれも声高な主張ではなく、むしろ弱さや不安定さを基調に静かな佇まいの中に積極的な意味を見いだす姿勢が感じられた。

慎重な協議の結果、今回のキュレーターに選出されたのは、鷺田めるろ。出品作家は岩崎貴宏で、テーマは「Floats」である。岩崎は、雑巾やブラシなどの日用品や髪の毛などで極めて小さな鉄塔などを制作することで知られるが、今回の展示では、送電設備である鉄塔のみならず、日本の海岸に林立する工業地帯や海洋資源開発のオイルリグ(掘削施設)など、日本の経済や社会を支えてきたモデルを繊細で儂い彫刻で制作する一方、潮の満ち引きで壊れることも想定されている宮島(広島)を木製の模型で展開して、会場全体をさまざまなレベルの水平線上の風景に見立てる仕掛けだ。地方と中央との格差、国同士がせめぎ合う海上の境界線、あるいは揺れる大地そのものである現代日本の置かれた状況が、海上の人工都市ヴェネチアにおいてその浮遊感とともに重層的に視覚化される。また、岩崎の工芸的ともいべき完成度を備えた彫刻も注目されるに違いない。

一方、保坂健二郎は、杉戸洋の「粒子とさまざまな力」を提案した。杉戸の一見弱く感じられる絵画と素粒子物理学との接点を探る意欲的な試みで、思いがけない飛躍が期待されたが、具体的なイメージをつかみにくい面があった。

片岡真実は、篠田太郎を提案した。日本館の内壁全体を粘土素材で覆いつくし、下地には安部公房の小説を張り込むという大胆なもので、独特の瞑想空間になるとは思われたが、今年のシドニー・ビエンナーレ出品作と近似しており、導線の問題など懸念材料が残った。

崔敬華は、藤井光による「寄留者たち」を提案した。福島原発事故以降の歴史と記憶にまつわる映像や言葉をさまざまな調度類とともに日本館内に配置する構想だが、映像と調度類の設えとがどれだけ緊密な雰囲気醸し出せるか、疑問が残った。

長谷川祐子(東京都現代美術館 チーフキュレーター)

第57回国際美術展コンペにおいて提出された4名のキュレーターによる提案は、いずれも作家の作品を中心として、それへの解釈のありかたをコンセプトにつなげるという自然な流れに基づいていた。

多くの現代美術展において作品の言説中心、映像、テキストへの偏向は、現代の状況の複雑さと、これを記録し、解釈するための視覚的装置としてのアートの役割への期待を反映している。その中で視覚性、身体性、感性、感情を検証することは、視覚芸術としてのアートの性質を再検証し、新たな意味の生産への可能性を検証することであるともいえよう。

身体性、物質性と情報、意味の生産の関係を、立体的に構築してみせたのが、鷺田氏(以下敬称略)の提案といえる。日本の地方都市の景観、エネルギー問題などから抽出した岩崎のマイクロな立体物は、脆弱さ、混沌、忘却など、リアリティを反映する寓意的な風景ジオラマとしてたちあらわれる。

細かい手仕事のなかに大胆で脱構築的な内的エネルギーを感じさせる岩崎の作風に、壊れる事、流され、フロウすることを前提としてつくられたという広島宮島の風景とベニス風景をかさねあわせる鷺田のメタコンセプトが重なる事で、弱さやマイクロサイズが、強い含意に変換されている。難民やテロなどによって共同体の中に危機をはらんだヨーロッパにおける「脆弱さ」への意識とよりそいながら、日本的な知と感覚のサバイバルのありかたからの提案となりえるのではないかという期待も含めて鷺田案を評価した。

他素粒子物理学のセオリー「弱い力」を杉戸の絵画に読み込もうとする保坂の斬新な提案、壁を覆った白泥がすこしずつ乾いてひび割れていく過程で背後のテキストがあらわれてくるという現象学的で時間的なドラマツルギーを内包し、身体や感性への働きかけを重視した片岡の篠田作品の提案、被災地域の閉じられたアーカイブ資料へのアクセスを再生し、別の次元で共有しようとする、記憶とモノの関係をといなおすチェによる藤井作品の提案、いずれも現代アートの展示がいまかかえている問題をそれぞれのレベルから問い直し、提案する問題意識の高さがうかがえた。

港 千尋(多摩美術大学 教授)

提案された4つの計画はどれも強い個性をもっており、それぞれのプレゼンテーションは、短い時間で企画と背後にある世界観を伝える高いレベルのものだった。保坂健二郎氏による絵画と素粒子物理学のコラボレーション案、チェ・キョンファ氏による、原発事故により失われた生活を、民俗資料的な展示として創るという案は、どちらも高度技術社会における、真摯な人間観を感じさせる。片岡真実氏による、イタリアの大理石を含む漆喰状の壁でパピリオンそのものを作品化する案は、時間とともに剥げ落ちてゆく計画で、環境と呼応する無常観を含んでいる。どれも作品の繊細さと、パピリオンの特徴を十分に理解した上で、それをどう変換するかという空間的配慮が共通していると思った。

この点で、第一席となった鷺田めるろ案もまた、日本館の特徴を十分に意識しており、特に中央の「穴」を一部として取り込むものである。岩崎貴宏氏のインスタレーションは21世紀ニッポンの風景を思いもかけないモノによって作る。コンビナート群や海洋開発の施設、巨大クレーンなどがある場所で、それは列島を技術力と物量的パワーによって「改造」する途上で加わった重圧の光景であり、低成長時代あるいは定常化社会に突入する今日では、ゆっくりと沈んでゆく脆さ儂さの象徴のようにも見える。こうした世界観が、沈む沈むと言われつづけながらも、その運命を引き受けつつしたたかに生き延びるベネチアで、どのようにアピールするのか、大いに期待したい。